

【論文要約】2023 年度 博士学位論文

育児と介護のダブルケア期に働く女性への仮説的支援モデルに関する研究 － ワーク・ファミリー・コンフリクトとストレングスの視点から －

Research on a Hypothetical Support Model for Working Women during The Sandwich Generation of Child Care and Nursing Care － From the perspective of Work-Family Conflict and Strength －

増田裕子 (Yuko Masuda)

主指導：木村容子 教授 / 副指導：壬生尚美 教授

キーワード：育児と介護、ダブルケア、働く母親、ワーク・ファミリー・コンフリクト

本論文は、序章、第1章～第4章、終章、結論で構成されている。

序章では、働く女性を取り巻く環境とその変遷、ワーク・ファミリー・コンフリクトやダブルケアに関する状況を概観した。ダブルケア支援の現状だけではなく、育児支援の変遷と現状、介護支援の変遷と現状を示した。第1章では、育児と介護のダブルケアに関する先行研究を整理し、本研究での検討課題を提示した。第2章では、ワーク・ファミリー・コンフリクト理論とストレンクス理論に関する先行研究を概観し、本研究の理論枠組みを提示した。第3章では、調査1として、ダブルケア期に働く女性に半構造化面接を実施し、分析結果よりダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトとストレンクスや並立状態にメカニズム・課程、ダブルケア期に働く女性に必要な支援を検討した。第4章では、調査2として、先駆的なダブルケア支援を行う自治体の職員に半構造化面接をし、分析結果より先駆的なダブルケア支援を行う自治体で実施されている支援内容、支援体制・連携などを明らかにした。終章 総合考察で、育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデルを提示した。

序章 研究の背景と目的

序章では、働く女性を取り巻く環境とその変遷、ダブルケア支援の現状、本論文の着眼点・目的と意義、方法、構成、用語の定義などについて述べている。

働く女性を取り巻く環境とその変遷として、日本の働く女性を取り巻く環境の変化と、世界から見た日本の働く女性のジェンダー・ギャップについて述べ、働く女性を取り巻く環境を捉えた。その環境ゆえに生じる働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトをふまえ、働く女性の育児・介護のダブルケアという本論文における背景について記述した。

ダブルケア支援の現状として、日本では、今でも「女は家を守り、男は外で仕事」という分業が前提とされた制度構造であり、育児・介護関連の制度は改善の余地があるだろう。育児と介護のダブルケアの実態は、ジェンダー・ギャップの在りようと複雑に関係していることを銘記しなければならない。働く女性のライフコースでは、仕事と育児を両立する時期の役割間プレッシャーに対処して乗り越えることは重要で、仕事と育児だけではなく介護も加わった三者間の板挟みによる葛藤は大きな課題である。

本論文の着眼点としては、育児・介護のダブルケアをしながら働く女性の問題をワーク・ファミリー・コンフリクト理論で捉え、困難に対処する方略だけではなく、仕事とダブルケアを並立したからこそ得ることができたストレンクスにも焦点を当てて解決の糸口を探る。仕事とダブルケアの並立状況に至る過程と、最中、その後というプロセスに区切り、どのようなメカニズムで困難が生じ、どのように乗り越えてきたのかということにも着目した。本論文の目的は、「子育てと介護が相互に影響しあう、育児と介護のダブルケア期に

働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデルを探索的に検討すること」である。この研究を通し、核家族化や地域のつながりが希薄化する現代において、育児と介護のダブルケア期に働く女性とその子ども・家族が、仕事とダブルケアを並立することに意味や価値を見出すという意義があると考ええる。子育てと同時に介護が発生する負担・困難な側面だけではなく、同時発生するからこそそのポジティブな側面も捉えることで、かつて家庭内に存在していた人生の初期と終末期を同時に見ることができるかけがえのない期間と捉え直す機会にもなるだろう。ダブルケアを家庭の問題として捉え、その家庭を支えるために必要な仮説的支援モデルを検討した。

第1章 先行研究の検討と本研究の課題

第1章は、ダブルケアの実態や葛藤、支援についてダブルケア研究の動向や支援の実態を探ることを目的とし、育児と介護のダブルケアに関する先行研究を概観し、本研究で検討すべき課題を提示した。

育児と介護のダブルケアに関する先行研究を概観する目的は、「ダブルケアの実態や葛藤、支援についてダブルケア研究の動向や支援の実態を探ること」である。育児と介護のダブルケアに関する先行研究として、ダブルケアの実態調査、ダブルケア中の葛藤・困難・課題、ダブルケア中に得たもの・良かったこと、自治体におけるダブルケア支援の実態とニーズ、ダブルケアカフェにおけるダブルケア支援の実態とニーズ、仕事領域におけるダブルケア支援の実態とニーズなどの先行研究を概観した。ダブルケア向けの支援として、ダブルケア向けの支援プログラム、ダブルケア支援者向けの支援についての先行研究を概観した。先行研究を概観した結果、先行研究ではダブルケアの大変な時期にフォーカスを当てており、なぜ葛藤が生じ困難な状況になっているのか、その大変な時期の後、対象者はどうなったのか、どのような調整/対処をして相互作用が生じているのか、という過程は明らかになっていなかった。育児・介護のダブルケア期に働く女性は、育児・介護・仕事の状況が刻々と変化していくと推測できる。困難な状況になる過程を探ることで、仕事とダブルケアを行う過程において事前に先に起こる出来事を予測し、プロセスごとに必要な支援を提示することができる考えた。本研究における検討課題として、「仕事・育児・介護を並立する女性の生活全体のメカニズムや過程の把握」、「ダブルケア中の葛藤・課題・困難だけではないポジティブな側面への焦点」、「働くダブルケアラーのストレンスを引き出す支援モデルの必要性」、「理論枠組みにおける課題」を提示した。

第2章 理論研究

第2章では、ワーク・ファミリー・コンフリクト理論に加え、家庭領域と環境（地域社会）の間における相互作用のポジティブな側面を捉えることのできる理論としてストレンス理論に関する研究の変遷と動向などをレビューし、育児・介護のダブルケア期に働く女性の状況を明らかにするための理論枠組みを示した。

ワーク・ファミリー・コンフリクト理論とは、「仕事と家庭の役割が同時に生じることにより相互に両立しないような役割間プレッシャーにより生じる役割葛藤の一形態」とされている（Greenhaus & Beutell 1985 : 77）。育児・介護のダブルケア期に働く女性にとってのワーク・ファミリー・コンフリクトとは、仕事領域における社員/職員としての役割と、家庭領域における母・妻・娘役割の間に生じる葛藤であると言える。

ストレンス理論は、生じた葛藤に対し、ストレンスを発揮することで対処し、対処した経験を通じた学びが、また自身のストレンスになるという相互性があり、循環していくものと考えられる。本研究では、役割間葛藤に対してストレンスの相互性や循環性を重視する。ストレンスとは、「社会資源を活用する視点を重視し、クライアントのもつ成長や変化の可能性を生み出す能力や強み、経験を意味づけ、その人らしさを支えるモデル」であると捉えることができる。

ワーク・ファミリー・コンフリクト理論だけでは、仕事と家庭領域の間の葛藤やそれに対する対処行動しか捉えることができないが、ストレングス理論を援用することで、家庭領域内の妻役割・母役割・娘役割の間に生じる役割間葛藤や、家庭領域と地域社会のネガティブ/ポジティブな相互作用も捉えることができると考えた。ストレングスモデルに基づく、仕事と育児・介護のダブルケアを行う女性を中心とした、ワーク・ファミリー・コンフリクトの理論枠組みに基づき、仮説的支援モデルを提示した。本理論枠組みは仕事・育児・介護のダブルケア状態を示しているが、社員/職員としての役割、母・妻・娘役割など役割が増えていくごとに葛藤が生じる側面が増えることから、状況が変化すると考えられる。要介護者の介護度や子どもの年齢、仕事の状況などの状況が変わった際に、再度、ストレングスを発揮して調整/対処をし、また新たなストレングスを獲得するという変動的かつ循環的な理論枠組みとした。

第3章 調査1：ワーク・ファミリー・コンフリクトとストレングス

調査1の目的は、「仕事とダブルケアの並立状態をどのように捉え、仕事領域と家庭領域の間、または家庭領域内の役割間でどのような葛藤やネガティブな相互作用が生じているのか、逆にどのような相互作用が生じてストレングスを発揮/獲得しているかを明らかにすること」である。「子どものうち1人以上が小学生以下の時に親の介護をしている、または介護をしていた女性」かつ「同時期に1年以上就労をしていた人」を対象に、質問紙調査（面接調査法・他記式）とインタビュー調査を実施した。

分析1は、佐藤（2008）の質的分析法を用いて、仕事領域と家庭領域の間の葛藤・ネガティブな相互作用とポジティブな相互作用、家庭領域内での葛藤・ネガティブな相互作用とポジティブな相互作用の4視点で分析をした。分析2は、サトウら（2009）と荒川ら（2012）のTEM（複線径路等至性モデル）を援用してプロセス分析を行った。事例ごとと、開始順のパターンごとにプロセス図を作成して分析した。分析は、期間A「仕事＋ダブルケア開始前」、期間B「仕事＋ダブルケア中」、期間C「ストレングスを発揮し生活が落ち着きうまうまいくようになった後」の3つに分けた。12名に調査を実施し、ダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトとストレングスについて、仕事領域と家庭領域の間、または家庭領域内の妻役割・母役割・娘役割の間でどのような葛藤やポジティブな経験をしたか、どのようなストレングスを発揮して獲得したかを明らかにした。

分析1の質的分析結果としては、仕事領域と家庭領域の間の葛藤・ネガティブな相互作用とポジティブな相互作用、家庭領域内での葛藤・ネガティブな相互作用とポジティブな相互作用の4つの視点ごとに、期間A「仕事＋ダブルケア開始前」、期間B「仕事＋ダブルケア中」、期間C「ストレングスを発揮し生活が落ち着きうまうまいくようになった後」に区切って抽出をした。全体の傾向として、期間Aは、自分が頑張る、夫や家族と協力することで何とか成り立っていた生活が、期間Bでは地域社会や支援・制度・サービスへと支援を求めなければ、生活が立ち行かなくなることを明らかになった。

分析2のプロセス分析結果としては、仕事→介護→育児の順に始まった事例が、一番困難な状況に陥りやすいことが明らかになった。他の開始順ごとのグループでは、地域社会とのつながりに頼って何とか乗り切っている。育児が先であれば、子どもを介した付き合いでの友人や、同じ保育園・幼稚園の母親同士の付き合いの中で交友関係ができ、頼れる相手となることが明らかとなった。期間Cでは、仕事→育児→介護または仕事→介護→育児の順に始まったグループは、《ポジ：仕事が心の支えになった》というポジティブな相互作用が大半の事例で抽出された。また、12事例中、11事例で《ポジ：地域や社会の役に立ちたいと思う》が抽出され、仕事・育児・介護の並立経験を活かして周りの人を支えたい、地域社会に貢献したいなど、ストレングスを発揮して乗り越えた結果、新たなストレングスを獲得するという循環が生じていると考えられる。

第4章 調査2：自治体でのダブルケア支援

調査2の目的は、仮説的支援モデルを構築するために、「自治体において実施されている先駆的なダブルケア支援としてどのような体制でどのような支援を行っているのかを明らかにすること」である。調査1で明らかになった必要な支援に対し、現状の実現可能性を明らかにする。「先駆的なダブルケア支援を実施している自治体の職員」を対象に、半構造化面接を実施した。

分析方法は、質的分析を用いて、先駆的なダブルケア支援を行う自治体の体制、先駆的なダブルケア支援を行う自治体での支援内容、自治体におけるダブルケア支援の今後の展開の3つに分けて分析を行った。先駆的なダブルケア支援を実施している4自治体に調査協力を依頼し、協力を得られたのは2自治体であった。

分析3の質的分析結果として、《自：課題とニーズの把握》《自：ダブルケア相談の体制づくり》《自：領域を超えた知識習得のための研修を実施》《自：ダブルケアと相談窓口の認知度向上》《自：保育園・介護施設への入所基準の緩和》《自：当事者と連携》の6カテゴリーは、先行研究の内容と一致した。本研究で新たに明らかになった、あるいは詳細な報告がなかった点としては、《自：複合的な分野の相談を受ける体制づくり》《自：領域・部門間の情報共有と連携》《自：ハローワークと連携》《自：相談支援をする際の理解》《自：介護負担を軽減する》《自：他の自治体と連携》の6カテゴリーであった。

終章 総合考察

本研究の目的は、「子育てと介護が相互に影響しあう、育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデルを構築すること」である。先行研究をふまえ、仕事と育児・介護のダブルケアの過程を把握することで困難が生じやすい事柄や状況が見えてくると考え、TEMを援用したプロセス図を用いてダブルケア中に生じるワーク・ファミリー・コンフリクトやストレスのメカニズムを明らかにした。仕事・育児・介護の状況の変化に応じて何が起こり、どのような問題が生じ、どのような対処をしたのか、うまく対処できたのか/できなかったのかが明らかになった。それは、仕事+ダブルケアが始まる前と、仕事+ダブルケア中、そして生活が落ち着いた後という時期により、状況が異なることも明らかになった。それをふまえ、「育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデル」の枠組みとして、「予防的な観点からの仮説的支援モデル」、「仕事と育児・介護のダブルケア中の仮説的支援モデル」、「ストレスを発揮して人と社会に働きかける仮説的支援モデル」という3プロセスに分けて提示した。

さらに、仮説的支援モデルに取り入れるべき重要な視点として、仕事と育児・介護のダブルケアの生活をプロセスで捉えたことで得られた知見を提示した。「仕事と育児・介護のダブルケア期におけるリソースを総動員する必要性」、「育児より介護が先に始まった場合は、地域社会とのつながりを注視」、「状態変化が起きやすいタイミングにおける支援の再構築の必要性」、「要支援・要介護度と精神的な介護負担」、「育児と介護の状況が大変になる時期と仕事の意義」、「被介護者の看取りの時期が近づいてきた際の精神的サポート」、「生活が落ち着く等至点から始まる、ダブルケアのプロセスへの新たな意味づけ」、「地域社会に向けたストレスの発揮」の8点である。当事者自らが、ダブルケア中の方の生活課題や地域課題に対してストレスを発揮していくモデルである。当事者自らが支援に関わり、地域社会における資源の開発や啓発をするための活動を支えていることから、ストレスを発揮して社会に働きかけることを促す支援について提示した。さらに、状況に変化が生じた際に、その都度、支援体制の再構築が必要になることが明らかになった。支援をする際の確認・介入・調整が必要なポイントを提示し、支援計画の策定や見直すタイミングの目安にすることができる。

結論

仕事と育児・介護のダブルケアの状況をプロセスで捉えることで解決の糸口を探った結果、仕事と育児・仕事と介護という状況と、仕事・育児・介護の並立状況は大きく様相が異なり、複雑であることが明らかになった。働く母親が育児も介護も担う状況を、仕事領域と家庭領域の葛藤を意味するワーク・ファミリー・コンフリクトの視点から捉えることで、葛藤のみが生じている訳ではなく、逆に仕事に育児・介護が支えられているということが明らかになった。さらに、ストレングス視点を組み合わせることで、仕事領域と家庭領域だけではなく、それらを取り巻く働く女性の生活環境全体を捉え、予防的観点・一番困難が生じる時期・生活が落ち着いた後という3プロセスの枠組みにし、予防からさらに社会にストレングスが還元されるに至るまでの仮説的支援モデルを提示することができた。

本研究の目的は、「子育てと介護が相互に影響しあう、育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデルを構築すること」である。この研究を通し、核家族化や地域のつながりが希薄化する現代において、育児と介護のダブルケア期に働く女性とその子ども・家族が、仕事とダブルケアを並立することに意味や価値を見出すという意義があると考ええる。

本研究では、ワーク・ファミリー・コンフリクト理論を主軸とし、ストレングス理論を組み合わせ、「ストレングスモデルに基づく、仕事と育児・介護のダブルケアを行う女性を中心とした、ワーク・ファミリー・コンフリクトの理論枠組み」を用いた。理論枠組みの図は、中心に「個人（女性）」があり、取り巻くように「家庭領域」、その外側に「仕事領域」と「地域社会」、仕事領域の外側には「組織の就労制度」、地域社会の外側には「制度・支援・サービス」があり、ストレングス視点に基づき家庭領域を支える構図である。

本研究の成果を反映し、「予防的な観点からの仮説的支援モデル」、「仕事と育児・介護のダブルケア中の仮説的支援モデル」、「ストレングスを発揮して人と社会に働きかける仮説的支援モデル」の3つのプロセスに分けて、「育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデル」を提示した。ストレングスを発揮して社会に働きかけるというところまでを含めた仮説的支援モデルである。本仮説的支援モデルは、仕事と育児・介護のダブルケア経験から得たことや獲得したストレングスなどポジティブな側面にも焦点を当てている。それらを引き出したり意味づけしたりすることで、ストレングスを発揮し、社会に働きかけることで他の人にとってのストレングスとなり、ストレングスが循環するという観点を含めた支援モデルである。

先行研究では、ダブルケアの困難さポジティブな側面について明らかになっていたが、本研究によりどのように生じ、どのように対処して乗り越え、その後に当事者にとってその経験がどのような意味をもたらしてストレングスを獲得したのかが明らかになった。本研究の結果は、ワーク・ファミリー・コンフリクト研究とダブルケア研究の双方、そして、子ども家庭領域と高齢者福祉領域にとって新たな価値を提示したと言えるだろう。

本研究の限界と課題を8点提示した。「ワーク・ファミリー・コンフリクトやストレングスの量的な検証」、「仕事と育児・介護のダブルケアを経て心的外傷後成長が生じているのか等の量的検証」、「調査2の対象に偏りがある」、「仕事領域で先駆的なダブルケア支援を行う企業・組織・団体の調査」、「先駆的なダブルケア支援を行う自治体の支援で引き出されたストレングスの質的・量的な検証」、「児童と高齢者福祉領域側の共同でダブルケアの研究を掘り下げる」、「働くダブルケアラーに焦点を当てた制度・政策にも注視」である。